

# 視聴覚教材によるフランス語の 授業方法について

光華女子大学 森井正史

## は し が き

本稿は現在（昭和62年度）、光華女子大学で行なっているフランス語の視聴覚教育の方法を紹介しようとするものである。又、視聴覚方式の原理にも触れ、最後に将来への展望を若干述べることにしたい。

本学では、フランス語は、いわゆる教養課程の外国語科目第2外国語の選択科目の1つであり、授業は週1回（90分）であり、1年次と2年次の計2年にわたって行なわれている。フランス語の授業は、A.V.コース（audio-visuelコースの略称）と文学コース（文法一講読コース）の2つに分けてあり、フランス語を選択する学生は、このいずれかを選べばいいことになっている。A.V.コースでは、日常会話ができること、換言すればコミュニケーションの基本的な能力を身に付けることを第一の目標としている。又、聞き話し読み書くという4つの能力のバランスも考慮し、読み書きの学習も必要に応じて取り入れている。いずれにせよ、現代の話し言葉を中心に学習している。授業方法に関しては、クレディフ（CREDIF）方式<sup>(1)</sup>を大いに採り入れている。教材としては、ビデオ教材 <sup>アントレ</sup>Entrée <sup>リブ</sup>Libre 1（CLE international 社）を採用し、近年着々と備え付けられたビデオ機器を利用している。教室は、一般教室とLL教室を併用している。1クラスの人数は約20名で、殆ど全部の学生がフランス語の初心者である。ここで紹介するのは、1年次の授業についてである。

## 教 材

Entrée Libre 1 に含まれる教材のうち、次のものを用いている。

- ・ビデオ・カセット（全3巻）
- ・テキスト
- ・個人用練習帳（日本語版）
- ・個人用オーディオ・カセット（全4巻）

学生には、テキストと個人用練習帳の他に、60分生テープ2本をLL教室用と家庭学習用として持ってもらうことにしている。

テキストは全部で12課から成り、各課は次の6つの項目で構成されている。

- a. ストーリー編 (feuilleton) (アニメーション)
- b. 一語一語 (mot à mot)
- c. 広告フランス語 (publilangue)
- d. ルポルタージュ (reportage)
- e. 話し方 (façon de parler)
- f. 歌いましょう／歌いなさい (chantons/chantez)

このうちビデオ・カセットに収録されているのは、a, c, d, fである。個人用練習帳には、a～fの各項目に対応した練習問題 etc. が付いている。aは、12課を通して1つの物語になっている。フランスの地方都市の青年ニコラが、叔父の書店を引き継ぐためにパリに出てきて、友人ソフィの助力もあって、パリの生活に順応して行くというストーリーである。bでは語彙の習得、cでは文法の理解と習得ができるようになっている。dでは、ルポ形式で社会生活の中の様々な場面が紹介されており、フランス文化に対する理解ができるようになっている上に、ポイントとなる表現（会話）の反復練習ができるようになっている。eでは、一定の場面——例えば電話をかける時、道を尋ねる時 etc.——に於ける様々な話し方を学習するようになっている。fでは、歌を聞き歌うことによって、数詞や12ヶ月の月名など比較的やさしい語彙が自然と身につくようになっている。

学習の各段階に応じて a～f の各項目を適宜用いる。

## 学 習 段 階

各課の学習は、次の I～Ⅲの段階を経て終了する。授業中にテスト *contrôle* も行なう。

### I. 理解 *Compréhension*

1. 提示 *Présentation*
2. 説明 *Explication*

### II. 反復 *Répétition*

1. 発音矯正 *Correction phonétique*
2. 記憶 *Mémorisation*

### Ⅲ. 応用 *Exploitation*

### IV. テスト *Contrôle*

Iの段階でテキストの a を、IIの段階で d を用い、b, c, e, f をⅢの段階で用いる。昭和62年度の前期に於て、試みに a を I, II の両方の段階で用いたところ、時間がかかり過ぎること、学生の負担が大きいことが判り、a はやはり I の段階に留め、II の段階では d のみを用いる方が適切であることが判った。ここでは、この方の各段階の授業の仕方を述べることにする。参考までに学習段階をテキストの項目に従って共に示すと次のようになる。

1. ストーリー編……新しい言語要素の導入と理解
2. ルポルタージュ……反復
3. 一語一語、広告フランス語、話し方、歌……応用

尚、時間の都合により、授業中に学習できない部分は、適宜家庭学習として課すことにしている。

### I. *Compréhension*

この段階の目標は、その課のストーリー編をビデオで見せることによって、

新しい言語要素を導入し理解させることである。単に単語の辞書的・論理的意味だけでなく、イントネーションとリズム、さらに言語以外の伝達手段（ジェスチャー、態度、表情 etc.）や状況も併せて理解させるようにする。教師も学生も、映像によって示される言語以外の諸要素がコミュニケーションで果たしている役割を意識する必要がある。この段階では、テキストを閉じさせ、文字に頼らないよう予め注意しておく。

### 1. Présentation

ビデオによるストーリー編の提示。ストーリー編は各課で幾つかの場面——例えば第5課では、地下鉄・花屋・アパートマン——に分れているので、一まとまりの場面を一通り見せる。1回目の提示後、その場面が全体としてどういう場面なのか質問するなどして学生に発言を求め、おおよその理解ができているかどうかを確かめる。1回の提示で不十分であれば、もう一度提示する。第1課～第2課あたりでは、学生が不慣れなこともあり、3回位提示する必要があることもあろう。提示に入る前に手短かに概説をしておけば、学生はより一層容易に理解できるであろう。

### 2. Explication

会話のやりとりを逐一説明し理解させる。提示したばかりの一つの場面を、今度は、1つの文に対応する状況ごとにビデオの画面を暫く静止させ、まず、その状況やコンテキストを理解させ、次にその文の意味内容をプロゾディ prosodie（イントネーションとリズム）etc. も併せて説明する。教師は、必要と思われる場合——例えば動詞の不定形を示したりする場面など——以外は、文字を用いて説明することを控える。こうした説明を繰り返し、一つの場面の説明をし、その課のストーリー編全体の説明を終える。

説明の段階で教師が注意すべきこととしては、

- ・動詞の活用形は、すべてその不定形の綴りを示すこと、
- ・単語の意味を個々に説明するに留らず、文全体或いは少なくともリズムグループ<sup>(a)</sup>全体の意味を説明すること、
- ・具体的状況や登場人物の感情と関連させて説明すること、

- ・同一の語が、コンテキストや状況に応じて異なった意味で用いられている場合があるので、その文でどういう意味で用いられているか学生に考えさせる<sup>(3)</sup>、
  - ・その課のポイントとなる表現には、特に注意させること、
  - ・教師の一方的説明に終らないように、適宜質問をしたり、逆に疑問点があれば質問させるなどして、学生の発言の機会を増やし、授業からの疎外感を生じさせないようにすること、
  - ・1つの説明に必要な以上に時間をかけないこと、
- などが挙げられよう。

## II. Répétitions

発音矯正と、反復練習による記憶。「ルポルタージュ」を用いる場合、この段階に入る前に、Iと同じ要領で会話を短時間で理解させる。「ルポルタージュ」に出てくる会話は、その課のポイントとなる表現であり、その殆どがストーリー編に含まれている。又、場面もストーリー編と同じような場面であり、学生は容易に理解できるはずである。この段階の学習はLL教室で行なう。やはり、文字に頼らずに練習させる。

### 1. Correction phonétique

少なくともリズムグループごとに練習させ、発音を矯正する。矯正するにあたっては、或る音素と他の音素の対立を説明したり、日本語の発音との相違を強調したりする場合以外は、原則として音素や音節、単語を孤立させない。例えば、学生に特に明示したい音素や音節の部分だけ際だたせて強く発音してはならない。学生に、フランス語固有のイントネーションとリズム<sup>(4)</sup>に気を付けること、テープを繰り返しよく聞きフランス語の発音をよく聞き分けてから、そのリズムグループや文の発音練習をすることなど、予め注意する。学生がフランス語の発音に不慣れなため、1つのリズムグループ(ふつう8音節以内)、ましてや1つの文をスムーズに発音することが困難な場合がある。その場合は、そのリズムグループの最後の音節に次々とその直前の音節を適宜付け加えると

いう形で練習し、最後にそのリズムグループ全体をまとめて発音できるようにする。この時、イントネーションやリズムの他にも、リエゾン liaison (連音) とアンシェヌマン enchaînement<sup>(6)</sup> (連読) も無視しないで行なう。

音素全体の体系的・音声学的説明は、数回の授業を経た頃に行なう。

## 2. Répétitions

会話を記憶するために発音を繰り返す。やはり、リズムグループのまとまりを壊さずに繰り返させ、イントネーションやリズムに注意させる。又、1つ1つの会話に対応するテキストの写真を見ながら、具体的状況に身を置いたつもりで繰り返させるようにする。

## III. Exploitation

I, IIの段階の学習でフランス語の会話能力をかなり習得できると思われるが、一定の状況の下で自発的・自立的に表現したり、反射的に発話・応答ができるようになったとは必ずしも言えない。そこで、学習したばかりのことを、ストーリー編或いは「ルポルタージュ」で出てきたのと同じような場面で、実際に適切に使えるようにしなければならない。それが、この段階の目標である。筆記練習もこの段階で行うことにしている。

### 1. 語彙・文法の定着

「一語一語」を用いて語彙の習得を、「広告フランス語」で文法の理解と習得をさせる。

#### a 語 彙

この段階の目標は、一定の場面で——例えば花屋で買物をする時や、ホテルに宿泊する時などに——必ずといっていい位よく用いられる可能性のある語彙(多くは名詞)をマスターすることである。

まず、教師のあとについて、クラス全体或いは一人一人に繰り返させる。この時、テキストにある絵を見させたり、黒板に絵を書いたり、写真、スライドなどを見せたり、或いはできるだけ実物を見せるなどして視覚に訴え、できる限り、その単語と実物(或いは実物に近いもの)を直接結び付けるようにする。

そうすることで、その単語の記憶を容易にすることができるであろう。

語彙の筆記練習は、個人用練習帳を用いて行なわせる。これは、時間の都合のため家庭学習として課している。

## b 文 法

「広告フランス語」のビデオを見せ、その課に出てくる文法事項を理解させる。置き換え・変形・応答等による構文（構造）練習 *exercices structuraux* を個人用練習帳或いは教師の出題により、口頭及び筆記でさせる。口頭（テープ）による場合は、充分速いスピードで練習するよう指導する。即座に発話・応答ができるようにするためである。この練習によって、学生は構文の概念を意識するようになるであろう。

## 2. 話し方

テキストの「話し方」を用いて、ストーリー編や「ルポルタージュ」に出てきたような場面で様々な表現ができるようにすることが目標である。砕けた表現から丁寧な表現まで——例えば、相手の健康を伺う時の表現として、＜Ça va?＞「元気?」という表現もあれば、＜Comment allez-vous?＞「ごきげんいかが?」という丁寧な表現もある——、より一層広い応用力を身につけることができる。テキストの絵を適宜見させながらテープのあとについて、或いは教師のあとについて発音練習をさせる。個人用練習帳の表現練習は、家庭学習とする。

## 3. 歌

ビデオで「歌いましょう／歌いなさい」のアニメーションを見ながら、フランス語の楽しい歌を聞く。やさしい語彙（数詞、12ヶ月の月の名 etc.）が自然と身につく。文法や会話表現も歌詞に盛り込まれているので、その定着にもなる。既にⅠ又はⅡの段階で学習した言語要素が殆どなので、容易に歌詞を理解できるであろう。

## 4. Dramatisation

テキストの中に出てきたテーマ（場面）を1つ任意に選ばせ、実生活に於る場面を想定して寸劇（対話）を作らせ発表させる。つまり芝居をさせるのであ

る。学生を2人ずつペアにし、2人で対話の内容を考えさせる。但し、既に学習した語彙や表現を用いるようにさせる。教師は、発表させる前に、その場面に不適切な表現がないか、又、綴りや文法上の誤りなどがないか調べる。訂正するにあたっては、学生の創意をできるだけ生かす方向で行う。

#### IV. Contrôle

授業の効果と学生の到達度を判断するため、点検 *contrôle* つまりテストを行う。但し、これを成績をつけるという目的のためにのみ用いる必要はない。ここで、各学習段階の *contrôle* の仕方をまとめて示すこととする。

I. Compréhension……ストーリー編の各場面を充分理解できているかどうかを点検するため、教師用手引書の質問を利用するなどして答えさせる。但し、学生が初心者なので日本語で行う。

II. Répétitions……(1) 会話を充分記憶しているかどうか、又、正しい発音（個々の音素の発音 *articulation* だけでなく、イントネーションやリズムも含めて）ができているかどうかを確認するため、ビデオの音声を消し、映像のみを見せて、登場人物に代って会話をさせる。役を一人一人決めて行う。

(2) 会話の書き取り *dictée*

III. Exploitation……(1) 語彙・文法に関しては、個人用練習帳の筆記問題を利用する。その他には、ストーリー編に出てくる動詞（活用形）の不定形を書かせる問題を出す。動詞を辞書で引くには、不定形の綴りを知っておく必要があるので、こうした問題を出すのである。

(2) *Dramatisation* を、学習の成果の総合的点検とする。この場合、学生の対話をテープに録音しておき、評価する時に用いる。

以上の *contrôle* を、学習した週の次の週の授業時に行なう。但し、III-1(2)の *contrôle* は各学期末に行なう。

#### 視聴覚方式の原理

上で紹介した方法をとるにあたって特に留意した、全体構造視聴覚方式



Méthodes structuro-globales audio-visuelles=Méthodes S.G.A.V.<sup>(5)</sup> (いわゆる CREDIF 方式) の原理について、ここで少し触れておきたい。この方式は、P. Guberina 教授が述べている次のような観点から考え出されている。

「欧米でここ30年の間に生まれた多数の音韻学派、そして構造に対するさまざまな解釈は、言語学および語学教育に新しい道を開いたのではあるが、言語の構造はその役割からして言語の本来の機能に一致すべきであるということには十分な配慮がはらわれていなかった。つまり言葉のもつ意味の面は、しばしばないがしろにされ、語学教育においても状況と対話の全体的な関係は論理的、教育的に開発、発展を見なかったのである。<sup>(6)</sup>」

このようなことは、今日の日本の外国語教育についても、多かれ少なかれ当てはまるであろう。P. Guberina 教授は、言葉の本来の機能がコミュニケーション（伝達）であるにも拘らず、言語教育に於いては、言語伝達に伴う諸要素（イントネーション、身振り、状況 etc.）が考慮に入れられていなかったことに対して批判的立場に立っているのである。現実の生活に於ける言語伝達にあっては、話し言葉は、言葉そのものの持つ意味の他に、聴覚的要素（イントネーション、リズム、etc.）と、視覚的要素（身振り、手振り、表情、状況 etc.）を伴っていて、これらの要素は、補助的であるばかりでなく、主要な役割を果たすことがあり得るのである。<sup>(7)</sup> 言語伝達に於いては、音、イントネーション、身振りなどが1つの全体として機能し、発話者の感情面、精神面も、言葉そのものの意味と共に伝えられる。このような認識から、外国語教育に於いて、言葉をその使用条件、特に状況やコンテキストと切り離さないという、この方式の基本的原理が生じているのである。<sup>(8)</sup> 従って、この方式では、映像が会話のなされる時の言語外の要素 *éléments extra-linguistiques* を示し、引き続いて、それらの要素、特に状況との関わりに於いて、音声の意味を見出させるという手順で、言語表現を学ばせることとなるのである。

言語伝達が、聴覚的・視覚的な1つの全体であるという「全体構造」の理論は、発音教育の原理にも生かされている。言語表現(会話)を状況との関わりで理解させるということから、発音練習、特に反復練習は、文ごとに若しくは或る意

味のまとまりを持つ音声グループごとにする必要がある。ところで、フランス語では、文の内部でイントネーションが示すメロディの頂点が1つの味のまとまりを画し、個々の音は互いに結ばれて1つの連鎖即ちリズムグループを形作っている。この点でも、発音練習は、少なくともリズムグループ単位で行なうことが好ましいのである。実際、初心者が、フランス語の会話を聞いた時、容易に知覚できるのは、イントネーションである。音素の矯正をする時にも、このリズムグループのまとまりを壊さずに行なう必要<sup>(9)</sup>があろう。フランス語では、各音節は、ほぼ等しい持続 *durée* と強度 *intensité* を持ち、母音と子音が緊密に結びついていて、フランス語の文の規則正しいリズムのもとになっている。このリズムは、音節に区切って発音するだけで容易に得られる<sup>(10)</sup>。個々の音素の発音の誤りは、母国語の音韻体系とフランス語のそれとの違いから生じるのであるから、フランス語の音を学生に識別させるには、母国語との差異や、他の音との対立を示せばよい<sup>(11)</sup>。この場合、音声学的説明が有効であろう。正しい発音をするには、フランス語の音を識別しなければならないと同時に、フランス語の音をよりよく識別するには、正しい発音ができることが必要となろう。重要なことは、フランス語の文の模範的発音を学生によく聞かせ、イントネーションとリズムに、まず慣れさせ、さらに個々の音に慣れさせることである。この方式の利点は、言語表現を映像（状況）と関わらせることによって、学生の記憶を容易にするということ、又、授業に出てきたのと同じような状況に置かれた時に、応用し易いということである。

### 将来への展望

一般教育の一環としてのフランス語教育がもつ問題に関して、既に10年以上前から、語学シンポジウム（日本フランス語フランス文学会主催）などに於いて、盛んに議論がなされている<sup>(12)</sup>。外国語教育の目的、教授法と内容、動機付け、カリキュラムの問題など、様々な問題が山積しており、教師としてフランス語教育を新たに見直す必要に迫られているように思われる。昨今、多くのフランス語教師が懐いている危機感は、1つには、学生の学習意欲・動機の希薄さと

学習の効果を上げることの難しさに起因しているように思われる。そこで、ここでは視聴覚方式以外に学習効果を少しでも上げる方法として考えられることを2つ述べておきたい。

1つは、現在、本学に於いて実施しているような週1回という大変 *extensif* (非集中的) な授業を、もう少し *intensif* (集中的) な授業にすることである。筆者の経験からすれば、学生に家庭での復習を義務づけても、皆がしてくるとは限らず、1週間も経つと、習ったことを殆ど忘れてしまうというケースが、よく見受けられる。そうすると、復習をした学生と、しない学生とでは、習熟度に大きな差が生じ、授業がしにくくなる。*Intensif* な授業を行なう場合も、勿論、予習・復習は重要であろうが、現状よりは、学習効果が上がるのではないかと思われる。例えば、現在、週1回の授業であれば週2回(現在2回であれば週4回)とし、現在1年間で学習している内容を半年で終えることにするのである。そして、現在2年次で学習している内容を、後期の半年で終える。このように単位数を変えない場合、学生は、1年間でそれまでの2年分の内容を学ぶことになる。一方、教師の労働時間も、それまでと変わらないことになる。丈も、外国語の単位数が増えて、1週当たりの授業回数が増えれば、特別この方法をとる必要はないであろう。筆者は、学生が語学の他にも、並行して多くの教科を学んでいる以上、語学だけに集中すればよいとは勿論考えていない。が、語学の性質上、*intensif* な授業の方が、現在のように *extensif* な形にするよりは、自ずと学習効果が増大すると思われるのである。

もう1つは、一般教室で行なう授業の形態についてであるが、教師が初めから一定の内容を教えるという、いわば一方的な方向を逆にするという方法である。つまり、学生の方から学ばせる態勢を作るのである。学生に、或る場面及至はテーマを与え、1人1人に(或はグループ別に)会話の創作や作文をさせ、それを教師が個々に訂正し、最終的に、それを皆の前で発表させるのである。訂正は、学生の意志を生かす方向で行なう。この方法は、視聴覚教育の応用段階の *dramatisation* と同じ方法であり、特に新しいものではない。が、学習したことの応用として行なうのではなく、学生が初心者であっても、思い

切って授業の最初からこの方法を用いるのである。基本的な構文や、綴りと発音の関係など、或る程度の予備知識を与えておくことは勿論必要であろう。当然、和仏辞典、さらに仏和辞典や文法書も準備させなくてはならない。初心者に対しては、最初の頃は、簡単な表現ですむような、日常の具体的場面（挨拶、自己紹介、買物 etc.）を設定するようにする。場面（状況）作りのために、視聴覚方式の原理を生かして、写真・絵・スライドなどを用いれば、効果が上がるであろう。或る程度進んだ段階では、社会問題など一定のテーマを与え、個人的な意見を書かせ口頭で発表させることもする。皆の前で発音を矯正する時は、学生の心理を配慮して行なう必要がある。

この方法は、言語は元々、個人的目的のために使用されるものであるということ を考慮した方法である。言語は、自分が他者に何かを伝えたいという欲求や必要があるからこそ用いられるのであり、そうした欲求や必要が無ければ、言語を用いようという気持は生じないであろう。外国語の場合は、特にそうである。そこで、授業をするにあたってまず第一に、何かを表現しようという意欲を学生に無理なく生じさせ、次にそれをフランス語で表現させるという手順をとるのである。こうした過程を通して、教師は学生に、フランス語の表現ばかりでなく、フランス人の生活・習慣・マナー・物の考え方など広くフランスの文化に対する理解を深めさせるようにすれば、学生の学習意欲を一層増大させることができるであろう。教師には、相当な会話力・語学力の他に、フランスの文化に対する広い教養と知識が必要とされ、又、それなりの労力も必要とされよう。

この方法に対して問題点が幾つか予測されよう。例えば、学生によって学ぶ内容が異なってくる、文法事項を一通り学習することが困難である、日常会話の創作は、学生の精神年齢に適さず、学習意欲を却って殺ぐのではないか、試験と評価をどのようにして行なうのか、1クラスの学生数を大巾に制限する必要がある、…。しかし、こうした問題の殆どは、教師の創意工夫によって或る程度解決する可能性がある。たとえ困難であっても、メリットの方が遙かに大きいと思われる。例えば、個人に合った指導ができる、学生が自ら苦心・苦勞

して学んだことは、記憶に残り、身に付き易い。学生の想像力と思考力を生かせる、又、それらを延ばすことができる、学生は自分の考えを生かすことができるので、授業からの疎外感が生じない、創作する楽しみができる、自分で調べ表現する作業が身に付き、教室以外の場所で何かフランス語で表現する必要が生じた場合、いつでも対応できる、他の学生の発表を聞くことによって、自分たちが考えた表現以外の表現を学べる、グループ作業にすれば、相談し合うことで、私語をしたいという悪しき欲求が自然と解消される、…。要するにこの方法であれば、教師が一方的に知識を与えようとするところから来る学習意欲の減退を、完全とは言えないまでも、かなり防ぐことができると思われる。

さて、視聴覚方式は、特に初級のクラスでは、非常に有効な方法であることに今後も変わりはないであろう。学生がブースの中で、ビデオ・テープを用いてプログラム学習ができるようになれば、個人の能力に応じて学習ができ、その結果学習意欲も学習効果も一層増大するであろう。又、直接教授法・従来の伝統的教授法、*pattern practice* を中心とした audio-oral 方式の授業法なども、目標の如何によっては、今後も有効であろうし、<sup>103</sup> 学生の動機が強ければ、多少の訓練に耐えることもできるであろう。

いずれにせよ、学生の学習意欲を少しでも増進させるには、一方的・画一的な外国語教育から、色々な意味で学生の個性と自主性を尊重した教育への移行を迫られることになる。その移行のためには、教授法ばかりでなく、カリキュラムや制度上の改革も必要なのではないかと考えられる。1つには、幾つかの点で選択の幅を広げることである。選択科目の増加に限らず、学習時期の選択、教授法や学習段階（初級・中級・上級）の別による選択、試験を受けるか受けないかという選択などができるようにするのである。受講時期に関しては、例えば、授業の周期を半年とし、学生は教養課程の2年間で、4つの授業期間 *séance* の中から任意の時期を2つ以上（例えば初級の講座と中級の講座の2つ）選べばよいというようにする。4つの期間の他に、夏期集中講座を加えれば、さらに選択の幅が広がる。試験を受けないことを望む学生には、それなり

の資格なり証明（出席証明）なりを出す。1クラスの人数制限を上回らない限りに於いて、こうした選択の幅を最大限に認めるようにするのである。

このような仕組みは、欧米各国の大学などで行なわれている、外国人向けの語学講座に、久しい以前から見られ、決して珍しいことではない。我が国の大学内で、このような仕組みに変えることには、若干、問題もあるだろうが、学生にとっては、自分の好きな時期を選ぶことができ、しかも現在よりは短期間で終了するので、その分、集中して熱心に学習するようになるものと期待される。

#### 注

- (1) CREDIF は Centre de Recherche et d'Etude pour la Diffusion du français 「フランス語調査普及研究センター」の略称。この方式は、それが作られた（1954～1956）研究機関（Saint-Cloud 高等師範学校内の CREDIF と Zagreb 大学文学部音声学研究所）のある地名 Saint-Cloud（仏）と Zagreb（ユーゴスラビア）をとって、当初、「Saint-Cloud 視聴覚方式」或いは「Saint-Cloud-Zagreb 方式」と呼ばれていたが、「視聴覚全体構造方式」さらに「全体構造視聴覚方式」と名称を変えた。
- (2) 文中で、或る意味のまとまりを持ち、一まとまりで発音される単語のグループをリズムグループと呼ぶ。フランス語では、このグループの末尾の音節にアクセントが置かれる。
- (3) 例えば動詞 prendre（元は「(手に)取る」の意）は、テキスト中で「(書店を)引き継ぐ」(p. 15), 「(乗物に)乗る」(p. 17), 「買う」(p. 28) という意味で用いられている。
- (4) 元々発音されない語尾の子音が、次に母音で始まる単語が続く時、発音されることがある。これを liaison と呼ぶ。Liaison はリズムグループ内で密接に関連する単語の間で起る。Enchaînement は、単語の発音上の最後の子音を後続母音の音節に組み入れて発音することを言う。
- (5) 注(1)参照。
- (6) P. Goberina: *La méthode audio-visuelle structuro-globale et ses implications dans l'enseignement de la phonétique*, Studia Romanica et Anglica Zagradiensia, n°11, 1961, p.4. 訳は、『発音矯正と語学教育』（Claude Roberge 編著、大修館書店, p. 86）の訳文を用いさせて頂いた。
- (7) 『発音矯正と語学教育』p. 5, C. Roberge の引用より。
- (8) D. Coste, V. Ferenczi: *Méthodologie et moyens audio-visuels*, Guide pédagogique pour le professeur de français langue étrangère, Hachett, 1971,

p. 136.

- (9) G. Calbris: *La prononciation et la correction phonétique*, 同上, p. 61.
- (10) 同上, p. 61.
- (11) 同上, p. 61.
- (12) 『フランス語教育をめぐる — 語学シンポジウムの歩み — 中間報告』  
日本フランス語フランス文学会, 語学教育委員会, 1983
- (13) フランス語教育の様々な方法論に関しては, D. Coste (C.R.E.D.I.F.): *Le renouvellement méthodologique dans l'enseignement du français langue étrangère*, La pédagogie du français langue étrangère, Hachette, 1971, p.p. 10-28 に詳しい。

#### 参 考 文 献

Denis Girard: *Une classe de langue française aux débutants*, Guide pédagogique pour le professeur de français langue étrangère, Hachette, 1971.

*Préface de la Nouvelle Édition*, Voix et Image de France, livre du maître, Didier, 1971.